

えさし郷土文化館 企画展
HEART OF SWORD
郷土刀と装い

解説之書

私たちの心を捉えて離さない日本刀には、独特の魅力や文化が秘められています。

奈良時代以前、日本で作刀された最初期の刀剣は「両刃の剣」や反りのない真っ直ぐな「直刀」で、武器として扱う場合、打撃を与えたり、刺突をしたりするための用途でした。また、古代王朝の成立とともに、甲冑や武器が次第に発達していきますが、古墳時代から奈良時代にかけての主力武器は鉾や弓矢であったため、製作された刀剣のほとんどは神事に利用されたり、古墳の副葬品になったりするなど、祭神具としての目的で用いられていました。

その後の鍛錬技術の発達により、平安時代中期を境に現在にもみられるような日本独自の「反り」のある「湾刀」へと変化。刀剣は時代によって異なる戦術や用途に合わせ、少しずつ姿や形状を進展させてきた歴史があります。

このように、時代の要請によって成立した日本刀は、その社会背景の変化に応じ、実戦用の武器としてだけでなく、贈答用の芸術品、身分を表す権威の象徴などいくつもの役割を担ってきました。

平安時代に武士が勃興したことにより発展した日本刀が、現在のような文化的地位を高めたのは、機能美を追求し一切の無駄を省いた姿形をはじめ、古来の思潮を受け継いだ刀剣類に秘められた神性によるものかもしれません。いわば日本刀は単に武器以上の意味を持っており、灼熱の炎で鍛錬を重ね、研ぎ澄まされた地鉄の肌や刃文は日本独自の伝統美そのものといえます。

千年にもおよぶ歴史を継承する日本刀が果たしてきた役割を知り、今なお燦然と輝くその造形美に触れることは、日本の文化そのものを感じ取ることにも繋がることから、今回は奥州市内に残る郷土刀や仙台藩政時代の刀剣を中心に、刀装具類や甲冑などの武器をご観覧頂き、その造形に秘められた伝統文化を鑑賞する機会にしたいと思います。

展示協力者・機関（順不同・敬称略）

南鱗文庫 人首文庫

荻田耕造 佐伯研二 宮本升平

引用・参考文献

（財）日本美術刀剣保存協会宮城県支部『仙台藩刀匠銘譜』1943年
仙台郷土研究会編『仙台藩歴史事典』2002年
荻田如牛『江刺の刀工 萬歳安国一代記』2009年
えさし郷土文化館『鋼の美—江刺地方の刀剣—』2009年
一関市博物館『郷土のかたな～盛岡・仙台・一関～』2014年
一関市博物館『久保田宗明と大山明弘—寄贈刀剣類から—』2018年

凡例

- 1 本書は、令和4年4月29日（金）～6月26日（日）まで、えさし郷土文化館において開催する企画展「HEART OF SWORD—郷土刀と装い—」の解説書である。
- 2 本書での資料掲載順は、展示順序と一致するものではない。
- 3 掲載写真は所蔵者の許可を得て、えさし郷土文化館が撮影した。
- 4 本書の執筆は野坂晃平が担当し、えさし郷土文化館が編集した。

みちのく刀工の系譜

今日にみる日本刀の姿形は平安時代に成立したもので、それ以前の反りのある刀として知られているのが
蕨手刀である。蕨手というのは、柄頭が丸く、早蕨の頭部に似ていることから、そう名づけられている。刀身
は直刀で古墳時代の大刀よりも短く、飾り気のない素朴な刀であるが、東日本を中心とした全国に 200 点以
上が発見されており、特に東北地方での分布が顕著。岩手県内でも 70 例以上が確認されている。

こうした状況から、かつて蕨手刀は東北地方で生産されたという考え方や、刀身と柄の傾きや反りから日本
刀の原型になったのではないかという考え方があったが、形状や刀装金具の研究により、現在では上信地方（群
馬・長野県）で発生したとする考えが有力である。

平安時代後期、平泉藤原氏のもとで舞草（一関市舞川）に住み作刀していた刀工たちは、刀の変遷と日本刀
の誕生に大きく関わったといわれている。その名声は高く、舞草刀に代表される奥州刀は都で衛府の太刀とし
て使用されたほか、説話集や物語にもたびたび登場し、源氏や平家の宝刀とされたとも伝えられる。

平安時代末期、源頼朝によって平泉藤原氏が滅ぼされると、舞草鍛冶のほとんどはこの地を離れ、各地の刀
工へ影響を与えたとされるが、奥州・出羽両国では舞草鍛冶の特色を示す「寶壽」や「月山」による作刀が室
町時代まで続けられていたことが知られている。



短刀 銘 奥州住舞草光長

（表）奥州住舞草光長 刃長 33.0cm 平造 綾杉 直刀
室町時代 えさし郷土文化館

舞草刀は平安時代から室町時代にかけてその名声を博した奥州刀の代表格で、最
盛期は平泉藤原氏の時代とも伝えられる。刀工たちは当初、磐井郡の舞草（一関市
舞川地区）を拠点としており、鎌倉期以降は東北地方を中心にその作刀技術を広
めたと考えられている。陸奥国の「寶壽」、出羽国の「月山」に特異な鍛肌である
「綾杉肌」がみられ、北陸では越後の「桃川」、遠隔地では九州薩摩の「波平」がそ
の系統として知られる。

本作は太い板目が渦巻いてつまる地鉄の綾杉肌を特徴とする舞草刀の典型。室町
時代の作とみられ、「光長」の個名も珍しい。

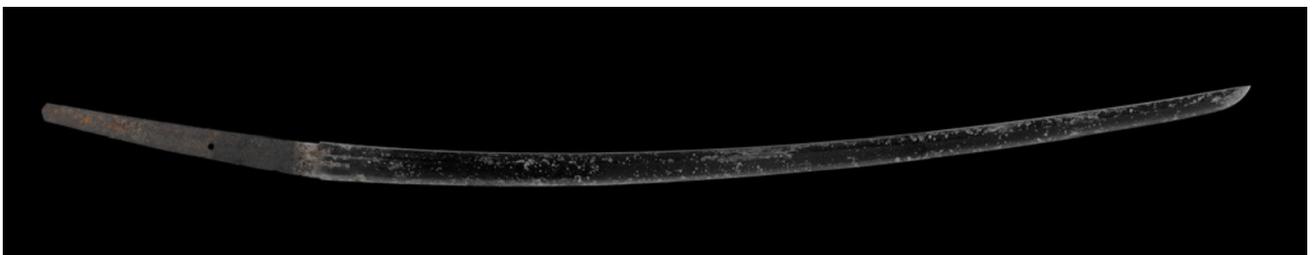


刀 銘 寶壽

(表) 寶壽 (折返銘) 刃長 63.7cm 鑄造 綾杉 直刃
南北朝時代 南鱗文庫

寶壽は古くから陸奥国に所在した刀工で、古文献によれば平安時代に「平泉住」とあり、当時の平泉周辺で活躍した舞草刀工であったと考えられている。しかし、今日に伝わる在銘作は鎌倉時代中期以降で、最も多く現存する紀年銘は南北朝期のものである。したがって、寶壽は舞草鍛冶の隆盛以後、中世の奥州で発展を遂げた刀工集団で、室町末期頃まで奥州の代表刀工として存続していたとみられる。

また、寶壽はその名の縁起の良さから室町將軍家では出産時の守刀^{まもりがたな}として珍重され、さらに江戸時代には贈答品としても用いられた。



太刀 (銘 来國光)

(偽銘) 来國光 刃長 85.7cm 鑄造 綾杉 直刃
室町時代 人首文庫

天正 18 年 (1590)、佐伯帶刀^{たておき}が葛西左京大夫晴信より感状とともに贈られた太刀と伝えられるが、茎^{なかご}に刻まれた「来國光^{らくにみつ}」の刀工銘は偽銘である。

来國光は鎌倉時代から南北朝時代にかけて活躍した山城鍛冶を代表する刀工で、傑作が際立って多いことで知られる。

本作は地鉄模様に「綾杉肌」と呼ばれる特異な鍛法が示されることから、出羽国月山の麓を拠点とした月山派鍛冶による作風であることが分かる。その特殊な鍛肌から「月山肌」の異名でも称され、近隣刀工では陸奥国の「舞草」「寶壽」の系統にのみその特色がみられる。

仙台藩の刀工

江戸時代、62万石の大藩となった仙台藩では、多くの刀工たちが鋤を振るった。

寛文10年(1670)の『侍帳』および『切米扶持方牒』によると、当時仙台藩に召抱えられていた職人は約880人で、そのうち刀剣関係の腰物方の体制は職人52人、弟子32人からなる84人であった。後に藩財政の逼迫により弟子分の給与が廃止され、以後は47～48の職人のみによる世襲体制が幕末まで維持されていた。

腰物方職人の内訳は、職人だけでみると鍛冶10人、研師11人、銀屋12人、鞘師10人、鞘塗4人、彫物師2人、柄巻2人、小刀研1人とあり、一振りの刀は7～8の専門職の分業によって作られていた。このうち、刀工は本郷国包、田代永重、大友国次、庄子包蔵、余目安倫、熊谷兼次、安部包吉、木村家定の8人で、家定家を除く7家は明治2年(1869)に解職されるまで存続した。

また、仙台藩の刀工は毎年、兵具蔵に備蓄する刀身や槍の穂などを作ることが義務付けられていたほか、藩主より特命を受けて贈答用の刀を鍛えた。



刀 銘 奥州仙台住藤原國包

(表) 奥州仙台住藤原國包 刃長 69.1cm 鑄造 柁目 直刃
江戸時代 南鱗文庫

國包は仙台藩御用刀工。

初代は藩主伊達政宗の命で越中守正俊に師事したのち帰国後は仙台藩に出仕。山城大掾を受領し日本刀系列の最上級品である最上大業物を残すなど、仙台刀工の代表格として知られ、13代目まで國包の名は代々継承された。

13代國包による本作は、直刃調の刃文、洗練された地鉄の潤いを呈し、初代國包が理想とした鎌倉時代の太和保昌伝の作域を示し、その傑出した作刀技術を裏付けている。



短刀 銘 國包

(表) 國包 刃長 28.6cm 平造 柁目 直刃
江戸時代 個人蔵

歴代國包に一貫される柁目肌に直刃を焼いた典型的な作風を示し、スラリとした姿形が美しい13代國包による作。

柁目鍛の作刀では随一と称された初代からの作柄が健全素直に継承された優刀。



脇指 銘 倫常^{ともつね}

(表) 倫常 刃長 51.6cm 鑄造 小板目 互の目
江戸時代 個人蔵

仙台藩御用刀工、余目家^{あまるめ}の初代倫祐^{ともすけ}門下の刀工で、寛文年間(1661～72)の作刀が多くみられる。銘は倫常のほか、仙台住藤原朝臣倫常とも刻んだ。



槍 銘 包蔵^{かねくら}

(表) 包蔵 刃長 13.8cm 両鑄造 板目 直刃
江戸時代 南鱗文庫

庄子包蔵は仙台御用刀工の中でも出仕が古く、仙台藩を代表する名工の一家。

初代包蔵は大和南都の出身で、文禄2年(1593)に伊達政宗によって召抱えられた。しかし、初代から3代までは紀年銘を切ることが極めて少なく、各代を判別することが難しいとされ、あるいは4代に至って初めて包蔵の銘を切ったともいわれている。



刀 銘 佐々木一流齋源貞俊^{いちりゅうさいみなもとのだとし}

(表) 佐々木一流齋源貞俊真十五枚太平伏造
(裏) 陸奥東山津谷川荒谷沢山以出鉄作之 刃長 64.4cm 鑄造 板目 直刃
江戸時代 南鱗文庫

一流齋貞俊は水戸藩主、徳川齊昭^{なりあき}の御用鍛冶だったといわれ、仙台の涌谷へ移住し一流齋を号して幕末に活躍した。また、嘉永3年(1850)から安政4年(1857)にかけては白石にも在住した。

本作は佐々木一流齋源貞俊と銘を切り、身幅元が広く大切先となる気迫溢れる一振^{しのぎ}。鑄地に刻された樋^ひが刀身を美しく引き締め、地鉄^{じがね}は地景^{ちけい}を強く出した八雲鍛^{やくもきたえ}に通じている。また、東磐井郡の産出鉄を使用して作刀したことが裏銘に刻まれる。

一関藩



刀 銘 一関士宗明

(表) 一関士宗明 刃長 74.8cm 鑄造 小板目 丁子
江戸時代 南鱗文庫

久保田宗明は江戸時代後期に一関藩御用刀鍛冶として活躍した名工。

一関藩士の意を表す「一関士」の文字を銘に切った宗明は本来、鉄砲鍛冶が家業であったが、嘉永年間(1848～53)藩命によって江戸に出て桑名藩御用刀工のこやまむねつぐ固山宗次の門人となった。

宗次の下で宗明は備前伝を習得したのち一関へ戻り、藩は宗明刀の所持を藩士たちに奨励したことによって宗明の名声は一円に広がった。宗明の刀剣について当時の仙台藩主伊達慶邦は「無類の鍛錬」と高く評価している。

明治9年(1876)に廢刀令が出された際、宗明は憤然と自作の太刀を振り回して刀身を折ったという逸話が伝えられている。



刀 銘 宗明

(表) 宗明
(裏) 文久元年八月日 刃長 69.8cm 鑄造 小板目 互の目
文久元年(1861) 南鱗文庫

宗明の師、固山宗次は備前伝を得意としたが、宗明はその節風を継承して作風はいちもんじ一文字風であり、同門のたいりゅうさいそうかん泰龍齋宗寛とともに宗次門下の双壁と称された。

身幅広めで反りの浅い姿形は南北朝様に近く、小板目肌の地鉄ににおいでま匂出来の互の目の刃文からは、自然味のある迫力が生み出されていて美しい。

江刺郡岩谷堂の刀工

仙台藩領の北端に位置する江刺郡でも余目安倫に師事した萬歳安國が岩谷堂を拠点に作刀を行い、鉄砲鍛冶である細谷重三郎が作例を残すなど、刀工の事績が伝えられる。

萬歳安國こと佐々木大吉は最初、岩谷堂の鍛冶職、彦四郎の師弟となり、年季を済ませたのち仙台へ出て八代目余目安倫の門人となった。備前伝、相州伝、美濃伝の三流を皆伝されると安倫の一字を名乗り用に「安國」と称した。

安國は岩谷堂に戻り本格的に刀工を営んだが、盛岡藩士の下斗米秀之進から大筒など兵器の製作を依頼されたことで、秀之進が弘前藩主である津軽寧親の暗殺を企てていることを知り、安國はそれを弘前藩へ通報。安國によって寧親は暗殺を逃れ、秀之進は江戸へ逃走。相馬大作と名乗りを変えて身を隠したが、翌年幕吏に囚われて獄門に処された。これが後にいう「相馬大作事件」である。

その後、安國は寧親に請われて弘前に移住するが、安國の門弟らは岩谷堂で作刀を続け、安國が弟子たちに授けた師伝は現代まで「萬歳(万歳)」を冠称する銘とともに伝えられている。

細谷重三郎は岩谷堂銭鑄町に鉄砲鍛冶を開業していたが、「雲龍子祐致」と号した大刀が現存している。この大刀は江刺郡二子町村の千葉譽右衛門が、同村の川島神社に奉納すべく製作させたものとされ、その鍛錬には怪異譚も伝えられている。

祐致が江刺郡原躰村の岩城山で作刀に励んでいたある夜、大型の猪が炉に飛び込み、その火熱で鍛錬したところ3尺7寸(113.7cm)にもおよぶ大刀が完成したのだという。

なお、細谷重三郎の本業が鉄砲鍛冶であったためか、雲龍子祐致という刀工名は記録がなく、同工の作例についてはこの大刀の一例を数えるのみである。



劍 銘 東奥仙片岡住萬歳安國作

(表) 東奥仙片岡住萬歳安國作

(裏) 文化十三年二月吉日 刃長 40.5cm 両鑄造 柁目 直刃

文化13年(1816) 南鱗文庫

頭が僅かに張り、身幅と長さの均整が保たれる姿形に優れた劍。ゆったりと湾れるような柁目肌に直刃をつけ、古雅な趣を醸成している。



朱漆塗笛巻合口拵

文化13年(1816) 南鱗文庫



脇指 無銘（萬歳安國）

刃長 43.3cm 鑄造 小板目 互の目

文政2年（1819）南鱗文庫

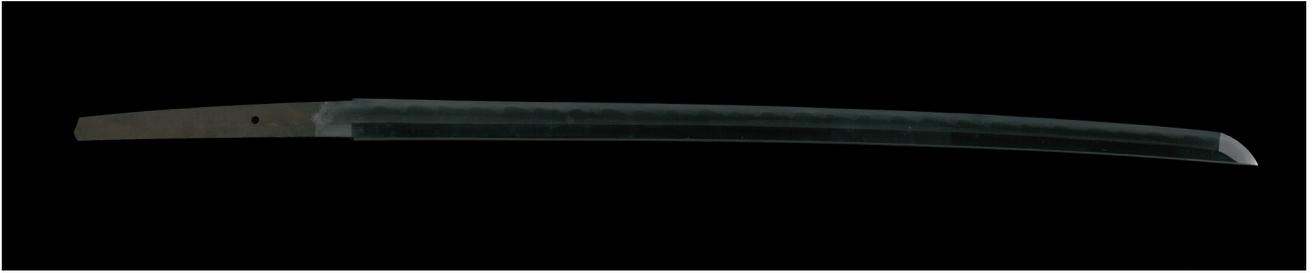
無銘であるが、姿形良く互の目乱れの刃文が冴え、小板目肌の鍛が精緻で美しい脇指。鞘書によると、文政2年に八戸南部領葛巻において萬歳安國が作刀したとある。



文政貳年七月廿五日ヨリ參萬歳安國太刀鍛冶作之
丙作 南部八戸葛巻砂子石ノ戸市右衛門宅ニテ茂木永治作之

脇指白鞘

文政2年（1819）南鱗文庫



刀 銘 陸中國住源明國^{みなもとのおさくに}

(表) 陸中國住源明國 刃長 68.0cm 鑄造 小板目 丁子
明治時代 南鱗文庫

岩谷堂の刀工、安國家世の明國こと佐々木安治は、一関藩御用刀工の久保田宗明の門で作刀を学び、明國の銘は師宗明と自身の系譜である安國の名乗りから用いて号した。

本作は、がっしりした造込みで反りの浅い体配。小板目肌の地鉄と丁子刃文の特色から、宗明師伝の意欲作であることがうかがえる。



大刀 銘 雲龍子祐致造之^{うんりゅうしすけむね}

(表) (枝菊紋) 雲龍子祐致造之
(裏) 文化拾酉年四月上旬仙臺江刺郡原躰村
於岩城山三七日以作鍛之
刃長 113.7cm 鑄造 板目 互の目
文化 10 年 (1813) 南鱗文庫

雲龍子祐致は本名を細谷重三郎といい、岩谷堂の錢鑄町に開業する鉄砲鍛冶であった。

本作は文化 10 年 4 月上旬、江刺郡原躰村の岩城山において三七日 (21 日間) 逗留して鍛えたことが長銘に刻まれる。

江戸時代以降の刀の規模は一般的に刃長 2 尺 3 寸程度が定寸とされていたが、本作は 3 尺 7 寸余の特殊な大刀であることから、寺社への奉納刀であったとみられる。また、本業は鉄砲鍛冶であったためか、祐致という名は刀工の記録にはなく、同工の作例については本作一例を数えるのみである。

盛岡藩



刀 銘 新藤源國義^{みなもとくによし}

(表) 新藤源國義

刃長 65.8cm 鑄造 柰目 互の目

元禄年間 (1688 ~ 1703) えさし郷土文化館

新藤國義は筑前福岡^{きょうのぶくに}の流れを引く刀工の家世出身。江戸に出て鍛刀中に盛岡藩主、南部信重に見出され召抱えられた。以後、盛岡城下の下小路^{したこうじ}に居を構え、幕末期までの約 200 年間、新藤家は盛岡藩第一の刀匠として主導的役割を果たしている。

本作は身幅が広く豪壯な乱れ刃を焼き、作風は総じて筑前信國派の特色を示している。元禄中頃の作刀で、傑出した作とされる。

備前国長船



刀 銘 備州長船祐定^{びしゅうおさふねすけさだ}

(表) 備州長船祐定

(裏) 元亀二年八月日 刃長 71.1cm 鑄造 板目 互の目

元亀 2 年 (1571) 個人蔵 (えさし郷土文化館収蔵)

備前長船 (岡山県長船町) には平安時代から脈々と続く刀工一派がいたが、鎌倉時代以降は刀鍛冶の本場として発展し、優れた刀工を輩出。質・量ともに他地域を圧倒し、刀剣の一大生産地として長年にわたり隆盛を極めた。

祐定は室町後期に最も名の知られた備前刀を代表する刀工名であり、最上作の「与三左衛門尉^{よそうざえもんじょう}」を頂点として数々の有品を作刀。数十にもおよぶ同名刀工が長い期間にわたって作刀を行った。

装いの美

刀剣の拵こしらえに付属する装飾金具一式を指し、美しい金具で飾り立て、所持する者の地位や権威を示し、また、様々な意匠が施されることで趣味嗜好が表される。刀剣を携帯し、使用しやすくするための付属装置全体を刀装とうさう、その部品を刀装具といい、精巧で優美な刀装具の形姿には各分野の工匠による高度な技術が結集している。

本来、刀装具には刀剣が損傷しないように保護する拵の補強具としての役割がある。しかし、刀剣が武器であると同時に、地位や権力を象徴する物となると、見栄えを意識して美しく華やかであることが求められ、そこで着目されたのが刀装具であった。

特に江戸時代以降は、日本の金工芸術が発展し、素材や意匠に凝った刀装具が多く生み出された。

主な刀装具としては、鐔つば、柄つか、釧はばき、目貫めぬき、筭ごうがい、小柄こづか、縁頭ふちがしら、柄巻つかまきなどがあり、中でも縁頭・目貫・小柄・筭には彫金加飾が施され刀剣の美術的価値を高めている。また、小柄・筭・目貫は「三所物みつところもの」と称し、刀装拵から分離して鑑賞する風習も生まれ、そのため美術工芸的彫金技術の発達が進んで近世美術の特色ともなった。

江戸時代はこれらの金工家が多く輩出され、それぞれ技を競い名品が造られた時代でもあったといえる。

刀装拵こしらえ



黒蠟色笛巻塗鞘打刀拵くろろういろふえまきぬりさやうちがたなこしらえ

南鱗文庫

貝図縁頭 赤銅魚子地高彫
官人図目貫 赤銅地容彫象嵌打
宝瓶文透図鐔 鉄地高彫象嵌打



黒蠟色塗鞘打刀拵くろろういろぬりさやうちがたなこしらえ

南鱗文庫

梅花図縁頭 金地高彫
梅花図目貫 赤銅地容彫象嵌打
鉄線花文透図鐔 鉄地丸形



しゆうるしいしめじぬりさやうちがたなこしらえ
朱漆石目地塗鞘打刀拵

南鱗文庫

縁頭 鉄地無文
龍虎図目貫 赤銅地容彫象嵌打
草花図鐔 鉄鍔目地木瓜形平象嵌打



あおがいくろるしいしめじぬりさやうちがたなこしらえ
青貝黒漆石目地塗鞘打刀拵

南鱗文庫

二引両九字文図縁頭 赤銅魚子地高彫象嵌打
牛鬼図目貫 赤銅地容彫象嵌打
十二支文透図鐔 鉄地丸形高彫



あおがいくろるしいしめじぬりさやうちがたなこしらえ
青貝黒漆石目地塗鞘打刀拵

南鱗文庫

虫図縁頭 鉄地高彫象嵌打
桐文図目貫 赤銅地容彫象嵌打
菊花図鐔 鉄地丸形高彫



くろいろぬりさやうちがたなこしらえ
 黒蠟色塗鞘打刀拵

南鱗文庫

- 猿曳駒図縁頭 赤銅魚子地高彫象嵌打
- 馬図目貫 赤銅地容彫象嵌打
- 松文透図鍔 鉄地丸形
- 龍図小柄 赤銅魚子地高彫象嵌打



くろうるしいしめじぬりさやうちがたなこしらえ
 黒漆石目地塗鞘打刀拵

南鱗文庫

- 縁頭 鉄地無文
- 小槌図目貫 赤銅地容彫象嵌打
- 琴柱文透図鍔 鉄地丸形



くろいろぬりさやたんとうこしらえ
 黒蠟色塗鞘短刀拵

南鱗文庫

- 笹竹図縁頭 赤銅魚子地高彫象嵌打
- 鶴亀図目貫 赤銅地容彫象嵌打
- 無文鍔 赤銅地木瓜形
- 松鶴図小柄 赤銅魚子地高彫象嵌打

つば
鑓

刀剣の柄と刀身との間に挟んで柄を握る手を防護する部位。

主に相手の刀から自分の手を保護するのが主な役割であるが、戦闘中に誤って自の手を刃に滑らせて負傷することがないように防御する役目もある。さらに、刀剣の重心を調節する機能も兼ねている。

大きさや形状、材質、形式などにより、その類型は多岐にわたる。特に江戸時代以降は各種色金、彫金技法を駆使しての彫金鑓が数多く造られ名工も輩出した。



八幡公鳩丸御太刀鑓写

銘 紀宗政

61 × 48mm 鉄鍔目地鳩形
江戸時代 えさし郷土文化館



浪雲龍図鑓 (水戸金工)

91 × 87mm 鉄地木瓜形高彫象嵌打
江戸時代 えさし郷土文化館



源氏車透文図鑓 (甲冑師)

85 × 83mm 鉄地丸形
江戸時代 えさし郷土文化館



牡丹花文透図鑓

銘 江府住並壽

68 × 66mm 鉄地丸形
江戸時代 えさし郷土文化館



銀杏文透図鑓

銘 盛岡住橋孝家造

83 × 76mm 鉄地撫木瓜形
江戸時代 えさし郷土文化館



野晒図鑓

78 × 68mm 鉄地十字木瓜形高彫象嵌打
江戸時代 えさし郷土文化館



屋島合戦図鏝

銘(表) 藻柄子喜多川宗典製

(裏) 江州彦根住

80 × 77mm 鉄地丸形高彫象嵌打

江戸時代 人首文庫



宇治川合戦図鏝

銘(表) 藻柄子喜多川宗典製

(裏) 江州彦根住

78 × 74mm 鉄地丸形高彫象嵌打

江戸時代 人首文庫



枝菊文透図鏝

85 × 85mm 鉄地丸形高彫

江戸時代 人首文庫



無文鉄鏝(古甲冑師)

84 × 81mm 鉄鈍目地撫角形

江戸時代 人首文庫



瑞雲図鏝

86 × 78mm 鉄地木瓜形肉合彫

江戸時代 人首文庫



浪雲龍図鍔

銘 山城國三條住柏屋四郎左衛門
70 × 67mm 鉄地丸形高彫
江戸時代 人首文庫



地文透図鍔

73 × 73mm 鉄地丸形
江戸時代 人首文庫



地文透図鍔

70 × 70mm 鉄地丸形
江戸時代 人首文庫



七宝文透図鍔

63 × 56mm 鉄地豎丸形
江戸時代 人首文庫



瑞雲図車文透鍔

80 × 75mm 鉄地豎丸形肉合彫象嵌打
江戸時代 南鱗文庫



鉢の木文透図鍔

80 × 77mm 鉄地丸形
江戸時代 南鱗文庫



しかもじすかしず
鹿紅葉透函鍔（古甲冑師）

87 × 87mm 鉄鎚目地丸形

室町時代 南鱗文庫



りんぼうもんすかしず
輪宝文透函鍔（甲冑師）

72 × 70mm 鉄地丸形

江戸時代 南鱗文庫

こづか 小柄

細工用の小刀。木を削る際や紙を切る道具として、鍔の小柄櫃に入れて携帯するが、武器として使用されることはない。

柄の部分には意匠に富んだ装飾が施される。



馬桜花図小柄 (水戸金工)

96mm 赤銅地高彫象嵌打
江戸時代 南鱗文庫



蟻通の宮図小柄

96mm 赤銅地高彫
江戸時代 人首文庫



千社札図小柄

銘 東□
95mm 赤銅地高彫象嵌打
江戸時代 えさし郷土文化館



浪図盛亀甲花菱文小柄

銘 石黒政美作
96mm 真鍮地高彫
江戸時代 えさし郷土文化館

はぼき 鉏

刀身の手元の部分に嵌める金具。鞘の鯉口部こいくちで合わせると刀身が鞘の内部に浮き、鞘の木部に当たらないように支える役目がある。元来は刀身を打つ鍛冶が鉄製で作ったが、のちに銅・銀・金などが用いられるようになった。



- | | | | | | | | |
|---------|-------|------|------|-----------|--------|------|----------|
| ① 斜め鍵 | 素銅地 | 江戸時代 | 人首文庫 | ⑤ 宝珠 | 素銅地 | 江戸時代 | 人首文庫 |
| ② 二重蔦紋 | 素銅地銀着 | 江戸時代 | 人首文庫 | ⑥ 七宝 | 素銅地金着 | 江戸時代 | 人首文庫 |
| ③ 二重紗綾 | 素銅地銀着 | 江戸時代 | 人首文庫 | ⑦ 富士越しの龍図 | 素銅地 | 江戸時代 | えさし郷土文化館 |
| ④ 二重腰祐乗 | 素銅地銀着 | 江戸時代 | 人首文庫 | ⑧ 加州 | 素銅地赤銅着 | 江戸時代 | えさし郷土文化館 |

目貫

柄の中央あたりの表裏に装着された小さな金具。

「目」とは穴のことで、^{なかこ}茎に空いた穴を貫いていることから目貫と呼ばれるが、実際は刀身が柄から抜け出さないように茎と柄を連結させるために使うのは目釘である。

目釘が実用の道具であるのに対し、目貫は刀剣を美しく装飾する目的があるが、表裏2点で1体となすことから、互い違いになるように装着され、それが左右の手のひらに当たって、滑り止めになるという役割もある。

刀装具のなかでも一際目立ち、華やかに飾り立てることができる箇所とされることから、この目貫に因んで、賑わいのある通りのことを「目貫通り」と呼ぶようになった。



牛馬図目貫

赤銅地容彫象嵌打
江戸時代 えさし郷土文化館



浪に鶴図目貫

赤銅地容彫象嵌打
江戸時代 人首文庫



水鳥図目貫

赤銅地容彫
江戸時代 人首文庫



布袋図目貫

赤銅地容彫象嵌打
江戸時代 人首文庫



漆図目貫

裏板金地容彫
江戸時代 人首文庫



布袋童子図目貫

赤銅地容彫象嵌打
江戸時代 人首文庫

縁頭

柄の部分に施された金具装飾。鐔のすぐ下に取り付けた金具を「縁」、柄の先端に取り付けた金具を「頭」という。頭は、鞘尻の鑑とともに、強度を高める目的があるので、金属あるいは角（動物の骨角や牙）が用いられた。縁と頭は、刀剣を装う金具類の中でも統一された世界観で表現されることが多く、意匠に凝った物が多数作られている。

なお、三所物に縁頭も揃えた物を「五所物」という。



猩々図縁

赤銅地高彫象嵌打
江戸時代 人首文庫



唐獅子図縁

赤銅魚子地高彫象嵌打
江戸時代 人首文庫



十二支図縁

赤銅地高彫象嵌打
江戸時代 人首文庫



輪宝図縁頭

銘 後藤光保（花押）
赤銅地肉合彫
江戸時代 人首文庫

ちやがたな 茶刀

帯刀や武具の持ち込みが許されない茶室に入る際にはいよう佩用した木刀。

武家は室内でも前差しを帯刀していたが、茶室においては無粋であることや帯刀を禁じられていたため、刀身がなく一体となった前差しを模した茶刀を差して入室した。茶室刀とも呼ばれ、装飾なども施されて独自の発展を遂げた。

茶室以外では部屋差しとしても用いられた。



①



②

① 茶刀 装飾脇指 44.6cm 木地和歌図高彫
江戸時代 えさし郷土文化館

② 茶刀 装飾脇指 42.1cm 木地家紋瑞祥図高彫
江戸時代 えさし郷土文化館

銃砲



さきごめしきさんもんめひなわじゆう 先込式三匁火縄銃

銘 陸中岩谷堂住細谷直朗作

135.5cm 外記カラクリ 三匁五分玉筒

明治時代 えさし郷土文化館

細谷直朗なおきは岩谷堂げにい銭鑄町の鉄砲鍛冶で、先代の重三郎うんりゆうしげむねは「雲龍子祐致」と号して作刀も行った。本作は銃身が2つの目釘で銃床に固定される特徴のせんたいづつ仙台筒。質素な外見と比して外記カラクリなど複雑な機構も備えている。



さきごめしきごもんめひなわじゆう 先込式五匁火縄銃

銘 有元禄年中木田重廣制之所 七世之孫木田直富
補之于時安政五歳

118.2cm 外記カラクリ 五匁大筒

元禄年間 (1688 ~ 1703) ・安政 5年 (1853) 後補 南鱗文庫

銃身が2つの目釘で銃床に固定されており、しょうせい照星が谷型、引金は透かし型、外記カラクリのいわゆる仙台筒であるが、口径は標準的な三匁より一回り大きく重厚。銘文には仙台筒の大家である木田家が、元禄年間に作製した銃を累世のなのおとみ直富が安永 5年 (1853) に後補したことが刻まれている。